
紅薔薇姫と銀の蜂

ばいおれんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅薔薇姫と銀の蜂

【Nコード】

N3397X

【作者名】

ばいおれんじ

【あらすじ】

忠実さと剣以外平凡な騎士と、とても美しい紅薔薇のようなお姫様。

そんな二人の過ちの一夜に見せかけた一方的な攻防戦。

本当に欲したのはどちらだったのかとシリアス風にうたっていますがおそらくコメディ。

退路は茨で塞がれた（前書き）

『謳われぬ末姫』 『騎士姫の初恋』 『不器用陛下の両片思い』 『賢
姫が愛した庭師』

とリンクしておりますが、読んでなくてもおそらく大丈夫です。
心持ち下品なのでご注意ください。

退路は茨で塞がれた

ようやく王女様達の物語も終盤にさしかかってきましたね。
今度の舞台は第二王女様の恋となります。

彼女には幼い頃よりひたむきに想う方が。

そして彼もまた王女様に恋情を向けております。

ですが王女様は拒まれるのを恐れ、彼は自分の立場をわきまえ、
二人は互いの気持ちを言い出せないままでした。

そうこうしている間に二人はすっかり年頃になってしまい……
おや、どうやらそんな関係にも転機が訪れたようです。

ではでは、いつものよう始めるといたしましょう。

姫君と騎士の、ある夜のお話を。

俺、ロンは男爵家の次男坊というなんとも微妙な立場に生まれた。
顔は平凡、頭は悪く魔法も全く使えない。野心何それ美味しいの？
と貴族らしくない俺は剣の腕だけが取り柄だと断言できる。

そんな俺は早々に父から見限られ、
城の騎士団に放り込まれる事となった。

脳筋な自分と剣は非常に相性が良かったらしい。
ひたすら鍛錬にのめり込み、メキメキと剣技を成長させていった。

だが一つ問題。

さっきも言ったが俺は爵位が低い。

それを表すかの如く、顔も普通を絵に描いたような男だ。
なのにどんどん出世していくもんだから、
周りのお貴族様からは物凄く嫌がらせされたのである。

自分より劣っている奴が偉くなったら腹立つよな、うん。
目の上のこぶなのも理解できるさ。

でも鼻水垂らしてた頃から実力主義を見せつけられ、
すっかり雑草魂が身に付いていた俺は普段逆らえない代わり、
模擬試合でとことん憂さ晴らししていた。
泣き寝入りなんて性に合わん。

そんな完膚無きまでしめあげる姿を陛下に見初められ
13才の時、俺は第二王女様の護衛役に選ばれる事となった。

初めて彼女に会った時の感動は忘れない。
ラドウガの紅薔薇姫とか言われてる位だからほのかに期待してたさ、
でも彼女の美しさは俺の理想より遙か上へ位置していたのだ。

ヴィアンクルージュ様、通称ビアンカ様。
年は俺と同じ。でも当時から彼女の美貌は冴え渡っていた。
腰まで伸びた真紅の髪、ぱっちりとした深緑の瞳、
肌も透き通るように白く、つやつやの唇は桜桃みたいで。
完璧という言葉は正に彼女の為にあるのだと思った。

ただ見た目通りのお姫様なら相手をできる自信がなかった。
でも彼女はそんな人形のような外見とは裏腹に、
やたら行動力があり、快活でさっぱりとした性格。

それでいて気遣いもできる、主にするには最高の人だった。

最初から意識していたが、あくまで主として仕えるつもりで、でも姫はさつきも語った通り、美人で優しく、しかも常時傍にいる。

となれば、なんとなく予想されていただろう。当然の事だ。

気付けばぞっこん。そしてさらっと失恋。

というのも彼女に好きな相手ができたのだ。

ただ幸いにもまだその恋は成就していないらしい。

お互い告白すらできず、

ずるずるとその関係が続いている訳である。

そんな不毛な片思い歴六年目に入った現在、

俺は崖っぷちにいた。

人払いしていたのが運の尽き。

おかげで誰もこの状況を止める者はいない。

しかも朝になるまで誰もやってこないのだから。

「あの、姫様……」

簡単に現状を説明しよう。

密室 in 倒れる俺 on the 姫。所謂馬乗りである。

逆だったら謝り倒して解決するが、

何分彼女が上であるから逃げるに逃げられない。

彼女は引くどころか、むしろ体重かけてくる。

だから尚更動けずにいた。

とはいっても姫は軽い。こんな悩ましげな体付きにも関わらずだ。だから物理的な問題ではなく精神的な問題なんだろう。

（完全に目据わってんなあ……）

悠長な事言ってる場合じゃないが、まさかここまで酒が弱いとは。

べっろべろじゃないか。早めに抜け出してきて良かった。

いや俺にとっちゃ全然よろしくない状態だけだな！

でも他の狼達に狙われて、あぐく美味しく頂かれるよりかはマシだろう。

今日はちよつとした夜会が開かれていた。

王女である姫はもちろんの事、護衛の俺も参加していた。

普段彼女は軽く食事を摘むぐらいだというのに、

何故か今夜は酒をあおりにあおって。

案の定酩酊し始めたから慌てて彼女の部屋まで戻ってきた訳だ。

こんな姿を晒すのは屈辱だろうと、

俺だけで看病をしていたら、ふらーっと彼女が立ち上がって。

支えようとしたらこの体勢になってしまった訳である。

「……ロン」

すーっと彼女の綺麗な手が俺の頬を撫でる。

表面を滑っていくその感覚に背筋がざわついた。

傾いちゃいけない方向に気分が動いていく。

「さわって」

その台詞を聞いて、一瞬意識が飛んだ。
大変魅力的なお誘いだがそれ受けたら終わるよな。色んな意味で。
どうにか理性を保っているが体は正直だ。どことは言わん。
ただ反応し始めているのは事実である。

「私の体じゃいや？」

生唾を呑み込む。彼女の体は正に俺の理想。

ただでさえ元が扇情的だというのに、

今夜は纏った服装がいつそう拍車をかけていた。

大胆にも肩を露出させ、またそのたわわな胸を強調するドレス。

酒のせいか、ほんのり赤らむ肌。

それは鼻先にあるやわらかそうなソレも例外ではない。

見ちゃいけないとは思うが目が離せない。

ぶっちゃければ俺は巨乳派である。

だからその視界の攻撃は非常に効果覲面。

「姫、男にそんな事言っちゃいけませんって！」

野郎共の汗臭い裸体を思い出し、

どうにか気分を萎えさせてはいるもののいつまで持つか。

そんな最中に彼女は俺の手首を取った。

そして押しつけられるマシユマロのような感触。

むにゅ、とそのけしからん胸に俺の左手が埋まる。

瞬間、思考回路が一気に吹き飛んだ。

爽やかな朝だ、だからこのまま死にたい。

朝起きたら姫に腕枕してました、すっぱんぽんで。

否定しようにも妙に体がすっきりしているとか以前に、
そもそも酔っていないから鮮明に覚えてる。

取り返しの付かない事をしてしまったと悔やむ俺に対し、
穏やかに眠る彼女がすりすりとし身を寄せてきた。

甘えるような仕草が大変可愛らしい。

が、吸い付くような素肌に昨日の記憶が甦って居たたまれない。

「……おはよう」

自責の念にかられていれば目覚めた彼女が俺に声を掛ける。
ぶわっと脂汗が吹き出た。

硬直する俺に彼女は軽蔑の目で見える事も罵る訳でもなく。
無邪気にふにやりと笑う。加速する罪悪感。

「……ロン？」

シーツを纏った彼女が心配そうに俺の顔を覗き込む。
過ちの後だというのにその瞳はあまりに綺麗で。
ぐちゃりと顔が歪む。いびな笑みを浮かべ、

「ちょっと切腹してきます」

「どうしてそうなるの」

半泣きで訴えたらつかさずツツコミが入った。

裸のままはずいという事で互い服を着込む。

姫は寝台の上に座り、俺は床へ直に正座。

そんな俺を姫は不思議そうに見つめる。

「……そんな所じゃ足痛いでしょう？」

いらっしやい、そうぽんぽんと隣を叩く彼女。

なんでこの方はこんなに優しいんだろう。

俺は自分をむさぼり食ったケダモノだというのに。

「俺には隣に座る資格なんてありません……」

「誰が決めたの、そんな事」

「それは」

「貴方の主は誰？」

「……ヴィアンクルージュ様です」

「じゃあ私に逆らっちゃだめよ」

にっこり、姫は華やかな微笑みを携えながら正論を述べる。

宥めるようなそれは実は命令なのだと気付き、

遠慮がちに彼女の隣に腰掛けさせてもらった。

そんな俺を見て、何故か彼女は苦笑い。

「昨夜何があったか、覚えてる？」

ロンが言った事も」

忘れようにも忘れられる訳がない。

姫に意中の相手がいる事を知っていながら、

好き勝手にその柔肌を蹂躪した挙げ句、

身勝手な告白を重ねて。ああホント誰か俺を殺してください。

「正直に答えて、ロンは私が好きなのね」

「……はい」

「じゃあ、どうして」

真摯な眼差しに、ごまかしは利くまいと正直に話した。
それに彼女は疑問を続ける。

ならば何故無理矢理犯したのか。

そう責められるつもりでいたのに、

彼女が発したのは全く違う質問だった。

「私の知らない誰かと結婚しようとしてるの？」

俯きながら彼女がぽつりと呟く。

団長から勧められただけでまだ決まった訳じゃない。

でもその話は内密だったというのに、何故彼女がそれを知っているのか。

そして何故こんな事を彼女が気にする？

「だめよ、」

「姫……？」

いくら剣を磨いても、心までは強くなれなかった。

弱虫の俺はこの不実の恋をすっぱり諦めたくて。

けれど、それには何かきっかけが必要だった。

彼女への想いを断ち切るのに十分な理由。

それをどうするべきか、

悩みに悩んでいた時に降って湧いたお見合い話。

最低の考えだとは思ったが利用すべきだと。

きつと結婚という鎖は俺を騎士の座に縛り付けてくれる。

だから昨日の時点での明日、よって今日、その話に乗るつもりでいた。

このような状況に至った以上はそういうわけにもいかないが。

「誓ったじゃない、私の事、ずっと守るって。

なら私より大切な人を作らないで」

確かに彼女が語る事は正しい。

でも俺じゃなくとも、いや俺よりももっと、

素晴らしくて姫を守ってくれる人はたくさんいる。

だったら俺のちっぽけな約束など忘れたらいい。

わざわざ固執する必要なんかないんだ。

「破るなんて許さない」

荒げた声ではない。でも彼女の一言は強く響く。

ぽたり、ぽたり、と瞳いっぱいに溜めた滴を落としながら、
縋るような目で俺を見た。

あの、気丈な姫が泣いている。その事に俺は動揺するばかり。

「……勘違いしないで、私は誰でも良かった訳じゃない」

「ひ、め？」

「ロン以外なら迷わず叫ぶわ。

助けてロンって、そしたらロンは絶対に救ってくれるでしょ？」

確認されるまでもない。

俺は彼女が求める限り彼女を守り続ける。

でもその護衛に襲われたならどうだ。

そんな気持ちが顔に出ていたらしい、彼女はふっと笑って。
俺の頬に手を伸ばす。跡は残っていたが、彼女の涙はもはや乾いていた。

「私は一国の姫よ？味方はロンだけじゃない。
いつだって貴方を切り捨てて人を呼べるの」

強かに俺に真実を教えこむ彼女。
頬に触れていた手が唇をなぞって。
それから啄むように口付ける。
反応をする間もなく行われ、俺は間抜け面で再び固まった。

「でも私もロンと同じ気持ちだから」

彼女が俺を罰しない理由を語る。
とびっきりの笑顔で。とてもあどけない顔だった。
いつも見せる妖婉なそれではなく、
まるでいたずらを仕掛けた子供のように。
無邪気と表すべきなのにどこか黒いものを感じるのはどうしてだろう。

心を囚われ、身も捕られ。
もしかして犯したつもりでいた俺こそが、
逆に奪われていたのかもしれない。

白いドレスを纏った彼女の隣で、
ウェディングベルを背景に、
そう気付いた時には何もかも遅すぎた。

退路は茨で塞がれた（後書き）

権力者が執着すると怖いのです。

もう一話は薔薇と言うより女王蜂ビアンカ様視点。
お付き合い下さりありがとうございました！

そして茨は蔓延り出す（前書き）

主人公が前話以上に黒いです。

作者の強かな女の子はジャスティス！な趣味が全力で出ています。

そして茨は蔓延り出す

ロンは知らない。

紅薔薇姫が示す本当の意味を。

明かす気もない、彼を手に入れるその日までは。

この呼称は表面上は私の赤髪と翠眼を指している。
だが裏をかけば全く別物となるのだ。

人は薔薇を見て真っ先に浮かべるのは幾重もの花卉であろう。
触れるまでその棘には気付かない。

と、それを念において例えている。

そうこれは私の気位の高さを風刺しているのだ。

見事に皮肉った物だと思う。

おそらく辞めさせた護衛が流しているんだろうが確かな証拠はなく。
それに調べるほど興味がそえられる話題とは言い難い。

時間を使うには下らなさすぎる。あながち外れていないのもあるか。

私はロンより前に二人護衛を持っていた。

どちらも私の夫の座を得るべく、送り込まれた貴族のボンボンだ。
騎士というのは一番傍に存在する異性、よって意識が向きやすいのだ。

だから純粹に私を守るといふよりか下心満載でやってきた訳だが。

先にネタばらししよう、私は自衛ができる程度には強い

姉上ほどではないが剣も使える、魔法とてお手のもの。
だから本当であれば護衛なんぞ必要なかった。
むしろお荷物以外の何物でもない。金魚の糞を誰が好き好むか。

ただ有力貴族の申し出を断って父の立場を悪くするのを避けたいが
為に、

仕方なく引き取っただけである。

でもやっぱり嫌々だと悪い者を引き寄せてしまうらしい。

一人目は男達に絡まれた時、私を置いて逃げた。

仕方ないから自分で始末して。もちろん護衛はクビ。

二人目はちゃんと外敵からは守ってくれたけれど、
私を性的な意味で襲ってきた。

まだ初潮が始まったばかりの子供相手に何欲情してるんだと
かなりドン引きしつつ、押し倒される前につるし上げて。

これなら前の方がマシだとは思ったが、結局どっちもどっちだ。

理由を説明するのも億劫で、問答無用で辞めさせたから、
自らが気に入らなかったからだと誤解されたが、反論は一切行わず。
ちゃんと問題点はある。でも実際にそれも一因だからだ。

もうこりごりだと、私は護衛を拒む為にも大人しくする事に。

面倒事を避けるように図書室に籠もるようにした。

しばらくすると二度の解雇で随分減っていた護衛候補達は
思惑通り完全にいなくなったが、私はそれでも図書室に通い続ける。

「……やっぱり凄いなあ」

夢見がちな童話を閉じて、窓の外へ視線を。
この部屋からは騎士団の鍛錬場が見える。

私がここに来る理由の九割は本よりもここからの観覧だ。
初めは騎士を務める姉の姿を見ていたのだが、
最近、目を向けるのは専ら彼ばかり。

「ふふっ、やつちゃえやつちゃえ」

今日は月に一度の模擬試合。

この日だけは階位完全無視の無礼講に下克上。
一番、彼が輝く日だ。

短い灰色の髪を揺らしながら、
彼は格上の貴族をどんだん蹴散らしていく。
見ていてなんとも爽やかな気持ちになれる光景だ。

彼の名前はロン、男爵家の次男坊。
幼い頃に父親から見限られ、騎士団へ押し込められたらしいが、
己の境遇にも負けず、努力家で実直な青年らしい。

らしいというのは私も姉上から聞いただけで、
実際に話した事は一度もないからだ。
いつもこうやって遠目で眺めているだけ。

でも姉上の言ってる事はまず間違いなさそうだ。
男爵というと五爵で一番低位。だが彼はとても強い。
また耳に聞く限り団長やうちの家族にも一目置かれ、
だからよく伯爵や侯爵達に絡まれているのだ。

私もここから何度か目にした事がある。
そんな状況でも普段は身分差から手出しできない。
だがたこ殴りにされるわけではなく、彼は見事にかわしていく。

そして模擬試合で本領発揮。こてんぱんに伸してしまうのだ。
負けず嫌いで一筋縄にいかないのはわかった。でも、もっと彼を知りたい。

だから私は彼を傍に置く事にした。

もうすぐ彼は私の騎士となる。

父上に思い切っておねだりしてどうか許可を取ったから。
前にあんな事があったから最初は反対されたけど、
最終的にはしぶしぶながら折れてくれた。

ただ私が直々に見初めた事は秘密。だって恥ずかしいもの。

二度ある事は三度あるになるか、三度目の正直か、
彼はいったいどちらに転ぶのかしら。

胸一杯期待に膨らませて、私はその日を待ち続けた。

彼を雇った後、始めの春夏秋冬を越えたのは、
とても短い時間だったように思う。

その後もひととせはあつという間に流れて六度目の夏が来た。

「やっぱりここにいらっしやっただんですね」

庭にある一番大きな木。

その上で微睡んでいれば下から声をかけられた。
やっぱり迎えに来てくれたんだ、と嬉しくなる。

「ちょ、危ないですって！姫！」

顔を見ずとも誰なのかわかっていたが、

落ちないよう身を乗り出してみた。

案の定、彼が慌てふためく。

その困った顔も好きだから彼をからかうのはやめられない。

「受け止めてね、ロン」

「はっ?! ちょ! 待ってください……」

彼の発言が終わる前に、

私は太い枝に足をかけて、思いっきり宙へ飛び出す。
ベル状のスカートが空気でふわりと更に膨らんだ。

口ではそう言っているものの、

彼は私を受け止める準備を終えていた。

何度も繰り返し返されたこのやりとり。

もう体が覚えているのだろう。

反射的に広げられている腕へと飛び込む。

「ほ、んと、止め……て、くださ……」

「ふふっ」

「笑い事じゃありませんって!」

ぜーぜーと彼が荒い息を吐く。

しっかり私を抱きしめたままで。

添えた手から伝わる鼓動はひどく早い。

「でもロンは絶対に私を傷つけないでしょ」

「……そうですね、万が一の事が」

「そうならないように頑張って」

「え、ええー……」

私の命令に怒る訳でもなく、
ロンはいつものよう、眉を下げながら曖昧な笑みを。

私はよく無茶な命をするが、

彼は困惑しながらもちゃんと付き合ってくれる。

だから私は付け上がって彼を更に騒動へ巻き込むのだ。

どこの子供だと言われそうだが、

嫌がる事をしてでも私は彼の気を引きたい。

こうやって抱きしめてくれるのだって、

普通に言ったら絶対逃げられるもの。

「姫様って六年前から変わってませんよね……」

「私としては随分変わったと思うけど」

「中身です、中身！」

外見に関してはわかりましたから、

布まくるのやめてください！！」

私から距離を置き、彼が溜息を吐く。

油断したところを狙って、

襟ぐりを引っ張り、胸元を見せつけられ、

真っ赤になって彼は顔を逸らした。

純情な反応が楽しい、ホントからかいがある。

でも口で何だかんだ言っても多少は気になるのか。

押さえてる手の隙間からチラ見してるのバレバレよ、ロン。

「もうすぐ花嫁修業の先生が来ますから」

「面倒ね」

「俺も勉強嫌いですから気持ちわかりますけど、

……いずれ必要になる事です」

帰りましようと、ロンが寂しそうに笑った。
差し出される手を私は取って強く握る。

「ロンが私を妻にすればいいのよ。

そしたらもうあんな堅苦しい事学ばなくてもいいわ」

「あはは。名案ですけど、俺は貴方の騎士ですから」

冗談なんかじゃないのに。

私の提案を彼はさらっと流してしまった。

城や街へ逃げる私をロンが迎えにきて、

私が彼をからかい無茶を振る、

そして手を繋いで、部屋へ連れ戻す。

このやりとりを私達は六年繰り返して続ける。

それ以上は何も無い。

ロンはまるで蜂みたいだ。

紅薔薇がどこにいても必ず見つけ出す蜜蜂。
わたし

懸命に私を守ろうとする姿も働き蜂のようだ。

ただ職蜂は雌のみで、守るのも王女でなく女王だし、
それに見返りの蜜を求めないのも当て嵌まらない。

似ているようで似てなくて、当然か。彼は人間なのだから。

ロンは蜂のように強く忠実で、それでいて無欲過ぎる。
だからこそ、私はこの騎士を愛してしまったのだ。

騎士は危険な役割だ、そして辛い仕事でもある。それを免罪符に過去の二人は私を手にすることで賄おうとした。もう一つ。少しでも仕事を減らしたかったのだろう。前の護衛達は私が自由であることを嫌った。

でもロンは違う。私に何も望まない。

木登りもお忍びも咎めなかった。

何故止めないのか、聞いたら彼はさも当然のように。

『例え危険な目に合うとしても、

それは姫にとっての幸せなのでしょう？

俺は騎士です。姫を守る、その為に存在しています。

だから姫の思うままに生きてください。

何があっても、俺がずっと守り続けますから』

その言葉は私の心をひどく揺さぶった。

全く邪心の籠もらない、真白い誓い。

それを彼はくすまない笑みで言いのけたのだ。

どうして、そんな誓約を私に与えてくれるのか。

彼と違って私は何も返せないのに。

私の価値は全て私を取り囲む物だけ。

王女の地位も、纏う煌びやかな品も、紅薔薇姫の名声も、ラドウガの姫に生まれたから与えられただけなのに。

私の騎士、それだけを理由に彼は。

気付いて私の心は陥落した、淡い恋から燃えるような愛へと。

初めて、奪われてもいいと思った。
彼になら何を捧げてもきつと後悔することはない。
でも、彼は私へ何か求める事は無く。
ただただ彼が一方的に私へ献身を贈るばかりだった。

時は過ぎ、夜会の前日の事。

その日は珍しく、私がロンを探していた。

騎士団長に呼ばれたまま帰ってこない。

代わりに付けられた護衛を欺いて、

見つからぬよう私は城中を走り回っていたのだ。

途中、セラ姉様に会って、

彼が向かった部屋を聞けだしたのは幸い。

あまり彼に迷惑をかけるんじゃないぞ。

と長くなりそうなお小言はさっさと切り上げて。

何故か嫌な予感がしていたから。

「……！」

「…、……」

姉様に教えてもらった部屋からは

薄く明かりと会話が漏れ出していた。

そのままでは内容まで聞き取れそうもない。

気配を消して、扉に耳を当てる。

今度こそ二人分の声ははっきり届いた。

「考えてくれたか、ロン」

「……すみません」

「先方はお前の答えを心待ちにしてるみたいだから、
できる限り早めに回答がほしい」

二人とも重苦しい様子で話している。

肝心な部分が上がってこないけれど、

私には密かに理解しつつあった。

「お前にとっても悪い話じゃないだろ？」

お相手のお嬢さんは相当、

白銀の騎士に入れ込んでるみたいだからな」

その一言に確信する。これはロンの婚姻話だ。

幸い、彼はまだ答えを返していない。

でもきつと近々彼は答えを出すのだろう。

上官から与えられた以上、きつと拒めない。

怒りにまかせ、拳を握る。

掌に伸ばした爪がささって、血が滲み出した。

だが激情する頭は痛みなどものともせず。

(……けして許すものか)

よその花などに居座らせてやるつもりは毛頭もない。

銀の蜂は私の唯一なのだから。

団長は無意識だろうと権力を使っている。

彼にとって断れない命を下せる少ない人物だ。

だがそっちがそのつもりなら私にだって考えはある。

忘れてはならない、私は更に上に行くのだと。

王女の地位を存分に振る舞ってやろう。
私から一生離れられぬように。

計画の為に、私はその場を後にする。

自室に戻って考えるのは、偶然を装った必然。

策略を巡らせながら、私は薄い笑みを浮かべていた。

貴方は誰よりも愛しい幸福運ぶ銀の蜂。

そして私は棘を携える紅薔薇。

だから貴方を茨の奥に閉じ込めて、逃がさない。

そして茨は蔓延り出す（後書き）

外見はリーチェさん、でも中身は陛下そっくり。

好きな相手関連は容赦ないところまで受け継ぎました。

ここまでお付き合いいただきありがとうございます！

最後に紅薔薇は綻んだ（前書き）

やっぱり主人公が黒いです。

前回の時点でアウトだった方はぜひお逃げ下さい。

最後に紅薔薇は綻んだ

自室で一人考えを巡らせていれば、
控え目にノックが行われた。

ロンだろうか、と一瞬思ったものの、
それは違うとすぐに気付く。

ロンのノックはこんなにも丁寧じゃない。
代わりの護衛が先に尋ねてこないところを見ると、
たぶん家族のうちの誰かだろう。

「ビアンカ」

「……セラ姉様」

やっぱり。案の定入ってきたのは長姉であるセラ姉様。
だがふと気付く。おかしい点が一つあることに。

「そういえばセラ姉様、

どうしてここにいらっしゃるの？」

「明日は夜会だから、

ラオと一緒に遊びに来たんだよ」

それで他国に嫁いだはずの姉様がいるのか。

本来ならさっき会った時に気にするべきだったが、
そんな余裕全くなかったのだ。

ロンがいない、それだけで私はこんなに取り乱す。

「……なあ、ビアンカ」

「何ですか」

姉様から呼んだにもかかわらず、
その先を一向に切り出そうとしない。
どれくらい待っただろうか。
暫く置いて、姉様は重々しく口を開く。

「ロンの婚姻話を知っているか」

「……姉様、知ってるの？」

「まあ、私の……」

「ラオの国の令嬢が切り出したことだからな」

「……そう」

「ラドゥガの民なら幅も利くが、
他国の貴人となると少し厄介かもしれない。

「姉様の嫁ぎ先もまた大国なのだから。
だからといってそう簡単に諦める程、
安い恋心ではない。」

「ロンはあまり乗り気でないだろう。
だからこちらでも遠回しに断ってはいるんだけどな。
話が通用しないんだ、ロンの口からじゃなきゃ聞かないって。
でもロンも断るに断れない立場だから」

「力になれなくてすまない、と
姉様は申し訳なさそうに呟いた。

「私とは違ってなんと律儀な人、眩しい位だわ。」

「教えてくれてありがとう、姉様」

「その、」

「でも大丈夫」

「え？」

にこりと笑みを向ける。
ただ口角は上がっても瞳は細めずに。

「きつとロンは断るわ」

断らせてみせる。

その状況を私が作ればいいだけの話。
だから自信を持って、私はそう、言い切った。

そして来る明日、夜会の時。

鍛錬用では無く公式の鎧を身につけ、
私を迎えに来たロン。

「似合わないかしら？」

今日は普段着るような白や淡い桃ではなく、
彼の好きな赤で決めてみた。

いつも以上に露出を増やした大胆なドレス。
それを纏った私を彼へ見せつける。

「え、いや……よく、お似合いです」

「良かった」

胸元から必死に目を逸らそうとするロンに可愛げを感じながら、
私はいつものように笑みを浮かべた。
決してこの疚しい心を悟られないように。

「……お手を」

咳払いを一つして、彼が手を差し出す。
そこへ自分の手を重ねた。

絹越しに努力の賜であるマメの感触。

鍛錬の代償を感じさせる堅さ。

この温かな手が私はずっと欲しかった。そう、ずっとだ。

（渡さない、絶対、私以外の娘になんか触れさせない）

つい手に力がこもる。

強ばりそうな顔を必死に和らげながら、

私は会場まで彼にエスコートされていった。

酒は人の本性や弱点を引き出す。

そして身分が高まれば高まるほど、

嗜む機会は増える物だ。

だから王族は酔いに対して、耐性を身につける。

国の頂きに座る者である以上、

他人へそう弱みを握られてはならないのだ。

私もその中の一人となる。

普段はちびちび口に含むだけだが、

今日に限り勢いよく酒を煽った。

ロンが心配そうに見守っていたけれど、

これぐらいで酔うほど、私は軟弱ではない。

か弱く見えるのは見かけだけだ。

それでもふらふらと足下がおぼつかないフリをする。
自分がへべれけになった事がないから、
よくわからないのだけれど、こんな感じでいいのだろうか。
前に見た酔っ払いを思い出しつつ、演技していれば、
ロンが慌ててこちらに駆けつけてきた。成功したらしい。

手を引かれ、外へと連れ出される。

そして私達はそのまま自室へと戻っていった。

ロンは全く私の演技に気付いていない。

どうにか二人きりになるべく、

色々と罠を用意しておいたのに。

根が素直なロンは一個目で完璧に引っかかってくれた。

……山ほど用意したのにちよつと残念だわ。

「あの、姫様……」

無事に押し倒し、馬乗りになれた事に安心して、
そんな事を悠々と考える。

婀娜っぽく見えるよう、動作にも気を遣う。

下に引かれた彼は硬直するだけで、
決して私を押し返す真似はしなかった。

こんな状況に置いて、抵抗するにできないんだろう。
彼の瞳には戸惑い。宿る健全な光はどう変わるのか。

「……ロン」

触れるか、触れまいか、
そんな微妙な距離を保ちながら、彼の頬を撫でる。
これには何か感じるものがあつたらしい。
さつきよりも眉尻が下がる、明らかな動揺。

「さわって」

たたみかけるように呟けば。
くっ、と彼の喉が鳴る。見開かれる目。
彼の胸に置いていた手から感じる激しく跳ね上がる心音。
何か言いたげにロンは何度も口を開閉させていた。

「私の体じゃないや？」

この一言に彼の喉仏が大きく動いた。
まんざらじゃない、と。
下から感じる熱に理解した上でロンに尋ねる。
わざと谷間を強調するように体を捻りながら。

もはや胸から視線を外せないらしい。
他の男に見られるのは不愉快だがロンであれば、
全く真逆の意味を持つ。

酒で多少火照っていた肌が、
彼の目に晒されて、更に体温を上げた。
意図せず吐いた息はいやに艶めかしい。
徐々に彼の瞳から理性が途切れていくのがわかる。
あと一息。ここで決めなければ。

「姫、男にそんな事言っちゃいけませんって！」

分からず屋ね。

貴方以外に言う訳無いじゃない。

煮え切らない態度に少々怒りを覚えながら、

私は彼の手を取って、胸へと押しつける。

「……」

彼が固まった。刺激が強すぎたのか。

でも私だって恥ずかしい。

好きでもなきゃ、こんな状況じゃなきゃできないわ。

汚い手だって分かってるけど、貴方を失いたくないの。

だから、答えてよ、ロン。

「姫」

これほどの事をしておきながら私は体を震わせた。

彼のそれは普段の声よりも遙かに低く。

ゆら、と彼の瞳に宿る光はあまりに昏い。

明らかに雰囲気が違うロンに怯えてしまう。

私がびくついて動けない間に、

あっさりと彼は押しのけた。

もともと力量が違うのは分かっていたけれど、

いとも容易く脱けられたものだから驚いてしまう。

それから起き上がった彼に抱きかかえられ寝台へと。

「んっ」

下ろされた瞬間、

唇に噛みつくようなキスが施される。

予想だにしていなかった荒々しさ。

今度は私が驚く番だった。

彼の唇は火傷しそうなくらい、ひどく熱かった。

舌と共に思考までも絡み取られる。

口付けをされたまま、胸をまさぐられた。

彼の手の動きで形を変えるそれに、

意図して触られているのだと実感されられ羞恥が湧く。

「好き、です。姫、」

肩口に彼が顔を埋めながら呟いた。

触れられながら、時折噛まれながら、

自分でも気がつかないうちにドレスが暴かれていく。

何度もうわごとのように、

好き、と、姫、と、繰り返す彼とは対称的に、

私はしっかりとした声で彼の名と愛を返して。

でもそれも最初のうちだけ。

次第に自分でも何を言っているのか

彼が何を言っているのか、分からなくなって。

ただロンが私の体を無我夢中でかき抱く事を喜びながら、
彼との一夜はゆっくりと流れていった。

起きるや否や切腹すると泣き出した彼を宥め、

距離を置こうとするのを嘖め、
どうにか私の隣に座らせた。

昨日とはまるで大違いの態度。

昨夜も驚かされたけど、今朝もまたびっくり。
どこに行ったのかしら？あの強引さ。

「昨夜何があったか、覚えてる？」

ロンが言った事も」

私の言葉にびくっと彼の体が浮いた。

その様子にこれは自責してるとなんとなく感じてしまう。
だから彼が罪悪感でまた何か言い出す前に、
私は流れに乗せてしまおう事にした。

「正直に答えて、ロンは私が好きなのね」

「……はい」

「じゃあ、どうして」

じっと、彼を見つめる。

逸らす事は許さないと伝えるかのよう。

汗ばむ手をぎゅっと握る。

一息飲んで、私は口を開いた。

「私の知らない誰かと結婚しようとしてるの？」

彼の黒曜が揺らぐ。

きっと決まるまで私に知らせる気は無かったのだろう。

もしかしたらこの様子を見る限り、

受けるつもりだったのかもしれない。そんなの。

「だめよ、」

「姫……?」

「誓ったじゃない、私の事、ずっと守るって。
なら私より大切な人を作らないで」

私には貴方の約束しかないのに。

それに縋って私は生きてきたのよ。

貴方にとっては些細な一言でも、

私にどれだけの喜びを与えてくれたと思ってるの?

知らないなんて言わせないわ。

もし知らなくても知ってもらう。

薔薇は蜂を手放せやしないのだと。

「破るなんて許さない」

潤む瞳で、でも彼を真っ直ぐ見つめて。

その言葉を口にする。

流れる涙は拭わずに彼の瞳を眺め続ける。

責め立てるような視線で、じっと。

「……勘違いしないで、私は誰でも良かった訳じゃない」

「ひ、め?」

「ロン以外なら迷わず叫ぶわ。」

助けてロンって、そしたらロンは絶対に救ってくれるでしょ?」

しばし沈黙を置いてから、立て続けに発言を。

わかりきった事を尋ねながら、

私は強かな笑みをはっきり浮かべる。

そう口にした時には密かに涙腺は閉まっていた。

「私は一国の姫よ？ 味方はロンだけじゃない。
いつだって貴方を切り捨てて人を呼べるの」

とはいっても、私はロンを傷つけるような人、
傍に置いておくつもりはないわ。

貴方を動揺させるのは私だけで良いの。

真実とは反対の事を思いながら、彼の唇に触れる。
今度は私の番。昨夜とは違って子供のような口付け。
ぽかん、と口を大きく開けた彼。
置いてけぼりだと示すその顔すら愛しいわ。

「でも私もロンと同じ気持ちだから」

心から、この上ない笑顔を見せる。

なんとなく私の本性を感じ取ったらしい。

青ざめ口角を引きつらせるロン。

そんな彼へ、ふふと嬉しそうな声を私は漏らす。

全ては貴方が私の心を奪った時から決まっていたのよ。
だって私は紅薔薇だもの。

蜂である貴方を逃がす訳ないでしょう？

私との婚姻に縁談は葬られ、
式の最中、彼はその事実に気付いたけれど。

「愛してるわ、ロン」

決して私の手を振り払うことなく、
もう一度、誓いを重ねる。

前とは違い、言葉ではなく唇で。

微笑む私に彼は頬を染めながら、
強く手を握ったのだった。

昔々、紅薔薇姫の名を得た二の姫様は、
自らを護る騎士と愛し合いました。

騎士が公女からの縁談を振り切り、
王女様との愛を貫いた事から、
身分違いながらも二人は数多なる人に祝福されたのでした。

きっかけは純粹と言えぬ二人ですが、
その一途な愛は命尽きるまで途切れることなく、
また美しい花と蜂を生み出したと人々は語ります。

こうして幸せな物語は紡がれていきました。

最後に紅薔薇は綻んだ（後書き）

やっと完結しました。

若干ロンが不憫ですが、彼なりに幸せなのであしからず。ここまでお付き合い下さり、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3397x/>

紅薔薇姫と銀の蜂

2011年11月13日17時30分発行